2015.12.27　聖家族

神殿での少年イエス

ルカによる福音　2:41-52

（イエスの）両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。

説教

＜エルサレムからナザレまでは 150 キロ＞

　電車やバスのない時代、歩くか、馬に乗る、らくだに乗る？しか移動手段はない時代です。150 キロの道のりは単純に時速 5 キロ（けっこう早足ですが）歩きとおして延べ時間で 30 時間です。一日 10 時間歩いたとしても 3 日間です。ヨセフ一家は何日かけてエルサレムまで行ったのでしょうか。わたしが想像するには、せいぜい一日 5 時間ほど歩く、それでも 5 時間×6 日間

で 30 時間、中一日、休みの日をはさんで、一週間、7 日間の予定を組んだのではないかとおもいます。
つい先日テレビでフランス人家族、父・母・男の子・女の子の 4 人家族の冒険旅行のニュースを見ました。彼らはフランスからベツレヘムまで 5000 キロの道のりを近代的な交通手段をつかわず、つまり電車やバス、飛行機などではなく、徒歩、自転車、フェリーをつかって家族四人でベツレヘムへの道を六ヶ月かけて踏破したそうです。冒険旅行の目的は聖地ベツレヘムでのクリスマス礼拝でした。いや、まったく凄いことをやるもんです。ヨセフ一家も真っ青ですね。お母さんは家族のきずなが深まったとコメントしていました。
＜イエス迷子になる＞
きょうの聖書箇所は少年イエスが神殿で活躍するという話ですが、ふつうに読むと？がたくさん頭の中に浮かんできます。
・毎年エルサレムにおまいりにいく？（行って帰ってだけでも二週間、お祭りは一週間続くので、大雑把に言えば一ヶ月ほど毎年の行事としてエルサレム詣でが習慣になっているわけです、いったいヨセフはいつ働いているの？）
・帰りの道のりでイエスのいないことに気づく（どこの親が 12 歳のこどもがいなくなって一日も気づかないことがあるのか？）
・ようやく見つけたイエスが母マリアに口答えをする（生意気なこどもとしてイエスが描写されているのは何故？）
ほかにもいろいろありそうですが、けっこう不思議がつまっている少年イエスのエピソードだとおもいます。
＜母マリアのおもい＞
お堅い解釈をひとつ紹介してきょうはおしまいにしようとおもいます。（あまり気乗りはしないのですが…）

イエスが処刑されたのは金曜日でした。そして日曜日の朝に復活します。イエス復活のエピソードにはサイドストーリーのようにからっぽの墓（マクダラのマリアがイエスの墓にいったら墓の中にはイエスの遺体はなくて、もぬけの空だったというエピソードです）がはさまれています。きょうの福音では過越祭がおわりナザレへの帰途について一日たった後、イエスがいないことに両親が気づき、三日の後神殿でイエスを発見するということが記されています。イエスは過越祭が始まる前日の金曜日に処刑され三日後の日曜日に復活します。イエスは金曜日にアリマタヤのヨセフによって埋葬されます。そして日曜日の朝、墓にはいない（からっぽの墓）ことがわかったと記述されています。弟子たちは処刑にもましてイエスの遺体のないことに途方にくれたようすが福音書に書いてあります。

さて、エルサレム詣でが終わり家路についたヨセフ一家は、一日たってイエスがいないことに気づきます。

親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。

こどもが迷子になったら親は必死にさがしますよね。そして見つかったら安心するのですが、たいてい小言をいいます。

母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」

復活のイエスに出合った（母マリアの反応は福音書には記されていませんが）弟子たちの反応は各々さまざまだったことが証言されています。12 歳の迷子になったイエスを神殿で見つけた時の母マリアのことばは記されています。「なぜこんなことをしてくれたのです」

そしてイエスがけっこう生意気な受け答えをしたあと、母の心情をルカはこう書き残しました。

しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に

納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された。

少年イエス迷子になる、というきょうの福音はイエスの死と復活の予表（前兆）だという解釈もありますという紹介でした。

杓子定規にこれはこれの前触れだと決め付けておしまいとすれのではなく、イエスが迷子になったこと、空の墓のこと、三日目にみつかるということ、などなどをマリアのように心に納めて思いめぐらすと、ひとりひとりの心の中にそれぞれのともし火が灯るのではないでしょうか。たとえいま失ったとおもっていても、ぜんぜんうまくいかない現実があっても、わたしたちの思いもおよばないことが備えられていることを信じましょう。